

大衆路線と少数精鋭路線の矛盾論(覚書)

2023年10月7日～8日

長野県上田市 渡辺規夫

watanabe@luctin.org

仮説実験授業における親切と不親切

板倉さんは仮説実験授業を紹介するとき、親切と不親切の矛盾論を使っていたと思われる。仮説実験授業を普及したい。しかし、間違った理解のもとに普及すると、仮説実験授業が変質してしまう。普及させたいけれども普及させたくないのである。

普及させるには初めてのの人に親切にすることが考えられる。親切にするとどうなるだろうか。仮説実験授業に少しでも関心のある人にどんどん会員になってもらい、どんどん授業をしてもらうとどういうことになるだろうか。

おそらく、仮説実験授業を誤解した人が大量に参入して、その成果はずたずたにされたであろう。

板倉さんが心配したのは、「仮説実験授業をやると出世できるのではないか」と考えた人が参入してくることだった。そのため、「仮説実験授業をしても出世できません。」と宣伝した。この授業の名前をつけるときもわかりやすい「予想学習」や「予想実験授業」ではなく、あえてわかりにくい(?)「仮説実験授業」という名称にした。これによって仮説と予想の区別のつかない人が参入して来ないようにした。また、授業書を入手するには条件をつけた。そのほか、授業書は勝手に改変してはいけない。授業書のつまみ食いはいけない。などいろいろな制限をした。

これはある人たちからすると「仮説実験授業研究会は不親切だ」ということになる。しかし、これは意図された不親切だったのである。

しかし、不親切にすれば仮説実験授業は発展しない。発展させるには親切にしなければならない。これは矛盾である。親切にしなければならないのだが、親切にしてはならないのである。

この矛盾を板倉さんほどのように扱っただろうか。板倉さんは誤解して参入してくることを阻止すると同時に、よく理解した人たちが参入しやすいようにしたのである。

仮説実験授業の考え方を理解し、その授業運営法を守る人たちに対しては、これ以上ないほど親切である。実験のしかたでわからないところがあるとすぐ教えてくれる。必要な実験器具は、売ってくれる。まさに至りつくせりである。

仮説実験授業は、「不親切にして、しかも親切にする」という矛盾を的確に扱ったため、適正な発展をしたのである。多くの教育団体が流行させて、一気に膨張して最初のねらいからどんどんずれていって、消滅した歴史から学んでいるのである。

まとめ

仮説実験授業は流行させず、着実に前進するようにしなければならない。

楽知ん研究所の親切と不親切

退職後社会教育としての仮説実験授業をしたいという人は少なくない。楽知ん研究所の活動を知って、それに関わろうとする人に対して、楽知ん研究所は不親切だという感じを受ける人が多いのではないだろうか。

教材をなかなか簡単には売ってくれない。値段を聞くと(これまでの教員の常識からすると)驚くほど高い。運営委員の年会費が6万円が高いのに驚いてしまう。普通感覚からすれば「楽知ん研究所は敷居が高い」と感じるのも無理はないと言える。

しかし、研究所の運営委員になってみると、これより親切な団体はないのではないかと思うほど親切である。ここでも親切と不親切の矛盾論の意識的適用があると言えるのではないか。

大衆路線と少数精鋭路線

社会運動には常に「大衆路線か少数精鋭路線か」という問題がある。大衆路線をとると、とんでもない考えの人が参入して、運動がおかしな方向に行ってしまう。考えの同じ者だけで組織を作ると、少数派からいつまでも抜け出せない。どうしたらいいだろうか。社会運動はいつもこの問題をどう扱うかで揺れている。^{*1}この問題を的確に扱っている社会運動は少ないようだ。

仮説実験授業は「授業書があれば誰でもできる」という点では大衆路線である。この点では仮説実験授業研究会の会員であるかどうかは問題にしない。しかし、「仮説実験授業の基本文献を理解し、授業運営法に従う。」という点では少数精鋭路線である。つまり、大衆路線であり同時に少数精鋭路線なのである。これは矛盾論の見事な適用例だと思う。

結論

大衆路線と少数精鋭路線の矛盾を適格に扱うことで、着実な進歩が期待できる。

提言

楽知ん研究所は少数精鋭路線から少しずつ大衆路線に舵を切る時期に来ているのではないか。

そうだとすると

- ① スタッフをやって楽知ん研究所の活動について理解しつつある人を対象とした研究会、入門講座が必要ではないか。
- ② 各地サークルで楽知んの教材の体験講座をやることも一案。
- ③ 初めて楽知んに関わろうとする人に対する敷居を少し低くする。

この点についていろいろな人からの提案があるといいと思います。(2023年10月6日)

*1 レーニンの『何をなすべきか』という本は少数精鋭主義を主張している。ところがその同じレーニンが書いている『左翼小児病』は大衆路線を主張している。レーニンが矛盾したことを言っているのである。矛盾したことを言わなければ本当のところは言えないということなのだろう。